

## Flow Analysis VI en Toledo

愛知工業大学 酒井 忠雄

受田、松本および今任先生にFlow Analysis VIの記事を書いて戴いたのでトレド学会の様子がおわかりいただけたことと思う。1988年4月にFlow Analysis IVがLas Vegasで行われたが、その時は石橋信彦先生(元九大工)を団長に12名が同じ便で成田を発った。私も初めてご一緒させて戴いたが、Los Angels-San Diego-Las Vegas



-San Francisco -Los Angelsの長い旅程もさほど苦にもならず、むしろ楽しい事が多く素晴らしかったとの印象が強く残っている。そんな訳で、何とか安くそして楽しくトレド学会に参加できる方法がないか、と本水先生(岡山大理)と相談中に私が安い航空会社を探すことになりお世話させて戴くことになった。6月6日に成田を発ち、モスクワで給油のための休憩(1時間程)の後、マドリッド経由でバルセロナに夜中に着いた。飛行機の出発日に制約されたため、おもいがけずもバルセロナを訪問でき、近代的かつ中世的街並を観光することができた。また、バルセロナならではの美味しい海鮮料理も楽しむ事ができた。マドリッドから大型バスで田園地帯を1時間ほど走り、中世そのままの古都トレドに着いたが、道中 広告看板が1つもないのには驚いた。トレドはグレコゆかりの地としてよく知られているが、近代建築には程遠いたたずまいと街並、迷い込んだら出口が分からなくなるような路地が多くなんとなく無気味な雰囲気には少々緊張した。それでも夜9時を過ぎてからトレドでは名の通っているらしいレストランにでかけたのだから遅いものである。学会はトレドの中心街から5 km 程離れたモダンなHotel Beatrizで開催されたが、我々一行も同じホテルに部屋を取ることができた。ここではアメリカ経由の今任先生とも同宿となり、一層賑やかになった。ホテルに着くなり、ロビーでProf. ValcarcelとProf. Luque de Castroに会い”熊本での約束どうり来ましたよ”と挨拶を交わした。その夜(6月8日)9時から、ホテルの庭でGet-together party、6月11日も9時からConference BanquetがConvento de San Pedro Martirという由緒ある建物で行われたが、不思議な事になんのアナウンスもスピーチもなくテーブル

毎にビールやワインを口にするようになった。これが型にはまらないスペイン風パーティーなのだろうか。しかし、Prof. Valcarcel と Prof. Castro の心細かな配慮のお陰で oral session も poster session もスムーズにかつ熱っぽく行われた。Oral session については紹介されたが、poster session では 1日目58、2日目60、3日目60の180件あったが、よく配置されており有意義に討論されていたように感じた。発表件数について主だった国と件数をあげるとスペイン81、イギリス14、日本12、ドイツ9、ブラジル8、フランス7、ロシア6、ポルトガル5、メキシコ4であった。スペインが圧倒的に多いが、研究機関は様々で Univ. of Valencia, Cordoba, Hospital Reina Sofia 等15からの発表があり、Flow Analysis の研究が殊に盛んであるという印象を受けた。発表は勿論多岐に渡っており、検出方法も様々であるが、高感度化、on-line digestion and monitoring、biological、clinical and environmental analysisに関するテーマに関心がもたれているように思う。日本ではあまりポスターの作成に力を入れない(内容で勝負?)が、今回のポスターには視覚に訴えるそして美的感覚のあるものが何点かみられ、アピールの仕方の差を感じた。結局、スペインのあるグループがポスター賞を獲得した。どこの国でも同じではあるが、スペイン人の参加が多かった事もあってあちらこちらにスペイン語のグループができ、少々気になった。しかし、Flow Analysis VIは我々を十分に満足させてくれたと思う。

この後、マドリッドで帰国組とグラナダ大学訪問組に別れた。グラナダはトレドとは違って水の豊富な所で、水気たっぷりのスイカの味は何とも言えなかった。たまたまグラナダ大学に知人がいたので、大学を案内してもらいまた学科長からも研究グループ毎の説明を受けた。私と本水先生はイオン会合反応について特別に討論する機会をもつこともでき実りある訪問となった。8日間あるいは10日間の間に日本人はもとより多くのFIA研究者に出会へ"いい思い出"をお土産に皆何事もなく帰国することができたことを大変嬉しく思っている。旅にはハプニングが付き物であるが二つ紹介しよう。Hotel Beatrizでの昼食は2時間程あった。そこでワインがだされ白を何本か空けた。そのとき、ボーイがスペイン語でワインは?とたずねたらしい。"もうたくさん"と答えたつもりだったが赤ワインが出され、これを空けるのに苦勞することになった。言葉は大切である。帰りの飛行機 割安の航空券のせいか、over booking となり一人も搭乗手続きができず待たされること約2時間。イライラ! イライラ! しかし、ない。諦めたころ、ビジネスクラスへ一人ずつ。だが、最後まで二人が残された。もう二泊か? 出発時刻を10分も過ぎた。そのとき、ようやく名前が呼ばれた。ファーストクラス。残り者に福あり。

3年後のFlow Analysis VII は Prof. Bergamineを chairmanとしてブラジルで開催されることになった。また、賑やかに行ければと思っている。